The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』における「境界」の存在
Author(s)	堤崎, 暁
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 59-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』における「境界」の存在

堤崎　暁

本稿で取り扱う、ジョルジュ・サンド（1804-1876）の『ジャンヌ[1)]』という小説は、1844年に新聞連載小説として発表された作品である。サンドはその後、1846年に『魔の沼』を発表し、これに続いて『愛の妖精』、『捨て子フランソワ』、『笛師の群れ』を発表した。これらの作品の中では、農村や田園風景、そこに住む農民たちの生活が描かれており、「田園小説」と呼ばれるこの4作品は、サンドの「田園四部作」と分類されることが多い。『ジャンヌ』は、タイトルと同じ名前を持つ農民の娘ジャンヌを主人公としており、本作においてサンドは、田園小説に先んじて、初めて農民そのものを主題として扱った。ジャンヌは、農民の娘でありながら、物語中では彫刻や聖母マリアに喩えられるなど、その人物像は外見的にも内面的にも理想化されて描かれている[2)]。そのような描写が目立つため、本作について論じる際には、後の田園小説の中で描かれる農民像との比較などを交えながら、理想化された農民としてのジャンヌの人物像に焦点が当てられることが多いが、本稿では、少し違った点から『ジャンヌ』という作品を見ていきたい。

本作は序章と25の章で構成されており、その物語は大きく分けて三つの舞台、ジャンヌの故郷であるトゥル＝サント＝クロワ、次にブサック、最後にモンブラにおいて展開される。そして、これらの舞台の描写の裏には「境界」というイメージが共通して存在している[3)]。本稿では、この「境界」の存在に着目しつつ、本作における空間の描写と、それぞれの舞台においてジャンヌがどのように描かれているかについて考察を進め、その上でジャンヌが果たしているある役割を提示したい。

1. ヒロインの故郷

本作の物語の冒頭は、1816年に時代が設定されており、トゥル＝サント＝クロワの近くにある、「ジョマトル石[4)]」と呼ばれる岩の上で眠っているジャンヌを、

1）George Sand, *Jeanne*, *Œuvres complètes*, 1844, sous la direction de Béatrice Didier, Honoré Champion, 2016. 以後、各引用後の括弧内にページ数を記す。また、引用にはすべて拙訳を用いたが、以下の邦訳を参考とした。ジョルジュ・サンド『ジャンヌ――無垢の魂をもつ野の少女』持田明子訳、「ジョルジュ・サンドセレクション」第5巻、藤原書店、2006年。

2）「古代の彫刻のような体つき（83）」、「ギリシャ彫刻のような足（153）」といった、身体を表す比喩として彫刻のイメージが用いられているほか、オウィディウスの『変身物語』の中に登場する彫像ガラテイアにも喩えられている。

3）本稿では、「境界」という単語を用いる際、フランス語の «frontière» を想定し、「二つの土地や概念が混ざり合う領域」を指すものとして扱う。

4）「ジョマトル石」«Pierres Jaumâtres» は、今日もなお残存している巨石記念物である。作中では、語り手の言葉によって「壮大さも美しさもないが、放棄と悲嘆の感情で満たされた不

ギヨーム、マルシヤ、アーサーの三人が偶然発見する場面から始まる。ジャンヌがこのジョマトル石を訪れることは序章以降一度もないものの、その後も度々この場所は話題に上がり、物語全体を通して読者に深い印象を与えている。第5章では、トゥルの村の司祭アランによって、かつてこのジョマトル石が贖罪の儀式において人身御供を捧げる場所として使われていたことが明かされる。そして、その直後の第6章で、ジャンヌの家が火事で燃え落ち、ジャンヌはトゥルを離れてブサックへと向かうことになる。序章の場面で、ジャンヌがジョマトル石の上で眠っていたことや、物語全体を通してジョマトル石の存在が印象付けられることは、ジャンヌがたどる過酷な運命を暗示しているとも考えられる。

ジャンヌの生まれ故郷であるトゥル＝サント＝クロワには、サンド自身1841年10月のはじめに実際に訪れており、10月の半ばには友人への手紙の中で、トゥルについての小説を書こうとしている旨を伝えている[5)]。そして、この土地は『ジャンヌ』の物語の中で次のように語られる。

> まさにこれが、ビトゥリゲス族とアルウェルニ族の間の国境地域を防衛する最も守りが固い要塞の一つが変化したもので、新しい境界画定がかなり前にクルーズ県の区画に戻らせたが、かつては交互にベリーとマルシュ、コンブラーユとブルボネであった曖昧な領土である。[…] トゥルは、中世においては、コンブラーユの境界のほとりのベリーの一番端の境界だった（48）。

このように、かつては境界に位置していたと語られる、トゥルという村は当時マルシュという地方に属していた。そして、この «Marche» という語も、元々は「辺境領」という意味の軍事的用語として用いられており、「二つの領主の領地あるいは国の間の国境領土を指していた[6)]」とされる。つまりサンドは、ヒロインの故郷として、村の地理的背景や、その村が属する地方の名前から、「境界」というイメージが示唆される土地を選んでいるのだ。

またこの土地に関しては、先に述べたジョマトル石をはじめとする、近辺に残存する「巨石式神殿の遺跡（35）」が描写され、「トゥル＝古代ガリア」の土地というイメージが与えられている。

> トゥル、あるいはむしろ、トゥル＝サント＝クロワの高地は、ユリウス・カエサルの統治下のローマ人に征服され、紀元4世紀にフランク族に破壊されたガリアの古代の都市である。[…] 残存しているもの、労働によってほとんど荒削りされていない石のとてつもない堆積は、そこにセメントの痕跡を探しても無駄であるが、我々の最初の祖先が使っていたような、原初のガリ

吉な場所（36）」と評されている。

5）George Sand, *Correspondance*, édition de Georges Lubin, t. V, Éditions Garnier Frères, «Classiques Garnier», 1969, p. 472-473.

6）Louis Deroy et Marianne Mulon, *Dictionnaire de noms des lieux*, Dictionnaire le Robert, «Les Usuels», 1992, art. «MARCHE».

アの都市の未加工の資材だ（47）。

このような土地の描写に加えて、語り手の言葉によって、この地方の農村集落の人々には「原初のガリア人の純粋な血（42）」が流れているという見解が示される。そして、トゥルで生まれ育ったジャンヌの信仰は、ガリアの時代にこの地で信仰されていたとされるドルイド教と、キリスト教、さらに農村特有の民間伝承が渾然一体となったものである。

> この時代［シャルルマーニュの時代］にもまだ、ドルイド教とキリスト教が陣地を奪い合っていたのであれば、今日これら二つの宗教が依然として、伝承の超自然的現象によって興奮した頭の中で混同されていることは意外なことではない。我々の農民たちはキリスト教についてほとんど知らず、彼らが受けることのできる宗教教育はあまりに初歩的なもので、より正確に言えば、あまりに取るに足らないものであるため、カトリックの神秘とそれ以前の崇拝の名状しがたい神秘は彼らにとって同じ程度に不可解なものであった（252）。

このように、混沌とした信仰を持つトゥルの人々の中でも、ジャンヌの母親であるチュラは特に古来からの伝承や伝説に執着しており、その精神は娘のジャンヌにも伝わっている。ジャンヌは、「ファド」と呼ばれている妖精たちの存在を固く信じるだけでなく、「全てのファドを支配する（214）」のは聖母マリアだとみなしている。また、トゥルには病人を治したり、自然災害を鎮めるために祈りを唱える「知識」«connaissance» を持っている女性たちがいると語られ、トゥルの司祭アランは、チュラもまたその一人であり、さらには「ドルイド尼僧チュラの子孫だと思われる（96-97）」とまで語る[7]。そして、その血を引いたジャンヌもまた、同じ「知識」の持ち主とされている。このように、トゥルで描かれるジャンヌの姿は、その土地自体の古代性、土着の信仰や文化の描写と相まって、ある種超自然的な力を持った古代の女性のような印象を与えている。

2. 故郷を離れたヒロイン

続いて物語の舞台は、ジャンヌ自身の移動と並行してトゥルを離れ、ブサックに移り変わる。このブサック城は、実際に存在する城で、ジョルジュ・サンド自身も訪れていたが、この城は都市と田舎の境目という特殊な位置に建っている。

> この城は、半分は街に、半分は田舎にある。中庭と、紋章で飾られたファサードは街に向いている。しかし、裏側は、それを支える垂直な岩と共にプ

7）ドルイドの特徴として、予言者や占い師としての役割を担っていたことに加えて、まじない師や医者としても機能していたことが挙げられる（Stuart Piggott, *The Druids*, Thames and Hudson, 1968, p. 108）。

ティット＝クルーズ川の川床にまで達していて、見事な景観を見渡している。岩山の中の切り立った急流の蛇行した流れ、栗の木が点在する広大な牧草地、広大な地平線、目がくらむほどの深さ（140）。

坂本千代は、「境界」のイメージに着目して、ブサックで展開される場面の描写を分析した上で、『ジャンヌ』の中では「町による田舎の伝統の破壊」「貴族とブルジョワの敵対関係」「ユートピア実現の可能性」という三つのテーマが展開されていることを指摘した[8)]。坂本が挙げた一つ目のテーマはすなわち、「都会人と農民の対比」とも言い換えることができる。

ブサック城の位置する場所が示すように、ブサックには貴族やブルジョワ、そして農民が暮らしている。第18章では、ブサック城近くの牧草地で行われる干し草の刈り入れに、ブサック城の住人たちが参加するという場面が描かれる。ここでは、牧草地の風景や農作業そのものというよりも、その場にいる貴族たちの不自然さが強い印象を与える。

エルヴィールは、村の娘のように丈夫だった。しかし、コルセットできつく締められすぎて、自由に動けずにいて、絶えず母から呼ばれていた。干し草の上に座り、日傘の下で熱にさらされている母は、気の毒な娘が牡丹のように赤くなっているのに気づいていた。

ギヨームは上着を脱いで、バチストのシャツの光沢を太陽に輝かせながら、女性の首のように丸くて白い首を露わにしていた（226）。

このように、単なる一つの行事のように刈り入れの作業に参加する貴族たちの様子が皮肉交じりに描かれている。反対に、ジャンヌにとってはこのような作業は慣れ親しんだもので、この章の中では、田園風景の中で農民らしく力強く働くジャンヌの姿が描かれる。しかし、マルシヤはジャンヌを見て、ギリシャ・ローマ神話の女神や、古代ギリシャの彫刻家「フェイディアスの彫像（228）」などに喩えており、まるで鑑賞の対象であるかのようにジャンヌを見ている[9)]。

この刈り入れの場面をはじめとして、街と田舎の「境界」に位置するブサックで展開される場面では、都会人と農民の融和というよりもむしろ、両者の対比が描かれている。そして、ブサック城に住み込み、侍女として働くことになったジャンヌもまたこの対比構造の中に組み込まれ、貴族やブルジョワたちに囲まれた環境の中で居心地の悪さを感じる。また、トゥル＝サント＝クロワ周辺の土地に関しては、歴史的背景や民間伝承などについて多く語られたのに対して、ブサック

8）坂本千代「サンドの『ジャンヌ』を境界の物語として読む」、『近代』、n° 104、2010年、p. 1-14。

9）ジェラール・ペイレは、この一連の場面に関して、次のような指摘をしている――「田園風景はここでは舞台装置でしかない。田野は、若者たちの文化を通して彼らによって認識され、美しいオブジェのように見つめられるジャンヌの身体に価値を持たせる舞台背景の役目を果たしている」（Gérard Peylet, *Le Musée imaginaire de George Sand : l'ouverture et la méditation*, Librairie Nizet, 2005, p. 104.）。

に関しては、はじめにその土地に関する歴史が少し語られたのちは対話が大部分を占めている。これは、新聞連載という形式が、描写よりも登場人物の行為や対話に重きを置いていたということに由来するとも考えられるが、城内での貴族たちの様子が主に描かれることで、自分に適さない環境の中でジャンヌが感じている閉塞感や孤独感を表現することにもつながっていると言えるだろう。しかし、ジャンヌは貴族たちの生活習慣に違和感を覚えながらも、それを非難することはない。

> 未開の生活から突然文明の環境に移され、はじめのころはジャンヌにとって全てが理解し難かった。彼女の田舎の生活の限られた必需品と、彼女が仕える貴族階級の人々のおびただしい数の人工的な必需品との間には、彼女の思考が乗り越えることを諦めた未知の大きな隔たりがあった。彼女ほど好意的な気質でなければ、これらの奇妙な習慣を非難したことだろう。(181)

「現代に運んで来られたドルイド僧の娘（183)」とも形容されるジャンヌは、ブサックという都市に移り住んでもなお、トゥルの村で母から教わってきた信仰や伝説、とりわけ妖精ファドの存在を頑なに信じ続ける。その姿勢は、ジャンヌと共にトゥルからブサックへ移住してきたクロディーから、ファドの話をすることは「街では愚かなこと（196)」だと忠告されても変わることはない。さらに、ファドについてマルシヤから嘲笑交じりに質問されても毅然とした態度で答える。

> 「そのことについてあなたに言うことは何もありません、マルシヤさん」ジャンヌは不満げな様子で答えた。「あなたがた学問のある方々にはあなたがたの考えがあり、私たち農民には私たちの考えがあります。私たちは単純です。それは認めます。しかし、私たちは昼も夜も暮らす田園で、あなたがたには見えないもの、決して知ることのないものを見ます［…］(206)」

ここでのジャンヌの主張は後に、サンドの自伝的作品である『わが生涯の記』の中でも、作家自身の言葉として繰り返されることになる[10]。ブサックにおいてもなお、故郷の伝説や信仰を信じ続けるジャンヌの純粋さは、同時に彼女の農民としての側面を呈示していると言える。そして、このジャンヌの純粋さを描写する際には、«poésie» あるいは «poétique» という表現がしばしば用いられ、ジャンヌは「詩情」の持ち主として描かれる。そのジャンヌの「詩情」は、マルシヤなど、彼女がブサックで接する文明化された人々には十分に理解はされないものの、ギヨームの妹マリとイギリス人貴族アーサー・ハーレーの二人はそれを理解する。

しかし、マリとアーサーという二人の理解者がいたとはいえ、ブサックでの生

10)「農民は伝承と伝説以外の歴史は持たない。彼らの脳は、都会生まれの住民たちの脳とは異なる。農民には、信仰や夢想、あるいは瞑想の対象の認識を自分の感覚に伝える能力があるのだ」(George Sand, *Histoire de ma vie*, dans *Œuvres autobiographiques*, t. I, 1970, p. 833.)。

活はジャンヌにとってはやはり不適な環境で、ジャンヌの感性に悪影響を及ぼしていた。物語の第20章においてジャンヌは、ギヨームから不意に愛の告白を受けたこと、トゥルに住む伯母が病気になったと聞いたことなど、いくつかの事情からブサックを離れてトゥルへと戻る決心をする。

> 耕されていない土壌に生まれ、そこに根付いた野生の植物である彼女［ジャンヌ］は、耕された土地に植え替えられて以来、かろうじて生育してきただけだった。彼女は自分の本当の環境に再び根を張り、故郷の岩に接吻することを渇望していた。［…］ジャンヌは日を追うごとに街で感情が失われ、窮屈さを感じていた。彼女は街ではもう少しで詩情を失うところだったとは思っていなかったが、人里離れたところの奥深くに入っていくにつれて自分が再び夢想家になっていくのを漠然と感じていた（253-254）。

ブサックからトゥルへ向かう道中、いわばブサックとトゥルという二つの舞台の「境界」にあたる空間で、それまで直接的には示されていなかった、ジャンヌの苦悩が語り手の言葉で吐露される。それに続いて、ジャンヌが幼少期の思い出を懐かしみ、次第に生気を取り戻していく様子と、辺りの風景の移り変わりが並行して描かれるが、この直後、空間の描写は突然不吉なものに一変し、ジャンヌは身の危険を感じ取る。

> 突然、死の鳥（ヨタカ）の不気味な鳴き声が、これらのすべての幸せな声に臆病で愕然とした沈黙をもたらし、ジャンヌは身震いした。［…］ある不吉な考えがジャンヌの心をよぎった。彼女はトゥルの鐘楼を見ようとしたが、雲が覆い隠していた。そして、その鐘楼をもう目にすることができないように、そこには決してたどり着けないように、彼女には思われた。冷たい汗が彼女の額を覆った。彼女は辺りを見回した。そして右手にバルロ山と薄暗いジョマトル石が見えた（254）。

ここで言及されている「トゥルの鐘楼」は、ブサック城のジャンヌの部屋から見えていた故郷の鐘楼で、ブサックにおいてはジャンヌの心の拠り所となっていた存在だった。そして、この鐘楼が見えない代わりにジャンヌの視界に入る、「バルロ山」と「ジョマトル石」は不吉な場所とされている。このように不穏な空気が漂う空間の描写の直後に、マルシヤが現れる。ジャンヌを自分のものにしようと企むマルシヤは、自分の所有であるモンブラの城館へジャンヌを導き、そこに閉じ込める。シモーヌ・ヴィエルヌは、この「モンブラ」という土地は、現在「モントゥブラ」«Montebras»という名で呼ばれている村を指していると指摘した[11]。この村は、トゥルとブサックそれぞれから約10kmほど離れた所に位置しており、

11）Simone Vierne, «introduction», George Sand, *Jeanne*, édition critique originale établie par Simone Vierne, Presses Universitaires de Grenoble, 1978, p. 15.

徒歩での移動も十分に可能であるため、ヴィエルヌの指摘に異論の余地はないだろう[12]。

ジャンヌとマルシヤは、真夜中過ぎにモンブラに到着するが、この土地の描写は暗い印象を与えている。

> 曲解からにせよ、その真の名の維持であれ、農民たちがミル＝ブラの要塞とも呼ぶモンブラの城館は、丘の上に位置する威厳のある廃墟だ。この見事な廃墟は、かつてガリアの要塞に取って代わった古代ローマの土台の上に築かれている。[…] この辺りでは依然として、古代ローマの基地やガリアの裁判集会の遺跡が発見されていると私は思う（259-260）。

軍事的施設である「要塞」や、「廃墟」など、モンブラに関わる描写には、「死」のイメージがつきまとう[13]。そして、この舞台で起こる出来事は、ジャンヌを死へと導く。マルシヤによって城館に閉じ込められたジャンヌは、純潔を守るために塔の窓から飛び降りて逃れ、倒れていたところをアーサーとギヨームに発見されてブサックへと戻る。この事件が原因で、ジャンヌは故郷に戻ることが出来ないまま死に至る。

つまり、ジャンヌが、自分の詩情が失われつつあったことを認識し、故郷に近づくにつれてその詩情を取り戻すこと、そしてジャンヌの死につながるマルシヤの謀略という、ジャンヌの感性や運命に深く関わることが、ブサックからトゥルへの帰還の旅の道中という、空間的「境界」を舞台とするわずか3章の間に展開されているということになる。

3. 仲介者としてのヒロイン

ここまで見てきたように、本作の物語全体を通して「境界」の存在が強い印象を与えている。これを踏まえて、最後に、本作の中でヒロインが果たしている役割について検討する。

物語の中での舞台の転換によって読者は、単に空間を移動するというだけでなく、時間さえも移動している。ジャンヌは生まれ故郷であるトゥルの村を出て、ブサックに移り住むが、貴族やブルジョワ達が住む文明化された都市であるブサックに対し、トゥルは古代の土地であることが強調されることで、「ジャンヌ＝古代の人物」というイメージも同時に印象付けられている。この古代のイメージによって、物語全体を通じて読者は、空間的側面ではジャンヌ自身の移動と共に舞台を移動し、さらには、時間的側面ではトゥルやジャンヌに見られる古代性と、ブサッ

12）ジャンヌとマルシヤが合流した地点の位置情報としては、モンブラまでは「1リュー、トゥルまでは2リューもある（257）」ということが、マルシヤの言葉で示されている。これに加えて、トゥルへ向かうジャンヌの右手にジョマトル石が見えているという記述があることから、サンドは具体的な地点を想起した上で、当該の場面を描写していると考えられる。

13）ヴィエルヌは、現在のモントゥブラには墳墓が残存していると語る（Simone Vierne, *ibid.*）。これは、サンドによるモンブラの描写が暗示する「死」のイメージとも一致することから、トゥルやブサック同様、サンドは実際にモンブラを訪れていたと推測することができる。

クやその住民の描写との対比を通して古代と現代を行き来しているとも言える。このように、ジャンヌはいわば、古代と現代を仲介する存在となっている。

ジャンヌはさらに、神と人間を仲介する役割をも果たしている。このことは、彼女が死の間際にアーサーに伝えた言葉によく現れている。

> 「ハーレーさん、あなたにお話したいと思います」突然ジャンヌがしっかりした声で言った。「あなたは善良な方です。神様にかなった方です。私の愛するお嬢様は天国の天使のような方です。神様と聖母マリア様に代わって、あなたにお嬢様と結婚するよう命じます。それから、聞いてください、トゥル＝サント＝クロワに行き、土地の人々を集め、今から私が言うことを私に代わって彼らに伝えてください。地中に宝があります。それは誰のものでもありません。皆のものです［…］(307)」

ここでジャンヌは自ら神の代理を名乗って遺言を残しているが、このような、神と人間を仲介する存在としてのジャンヌの役目は、死の間際になって突然現れたものではない。前述の通り、物語の中で「境界」の存在が印象付けられていることに加えて、ジャンヌに与えられた三人の女性のイメージによって準備されていたのだ。物語の中でジャンヌは、彼女の母がその子孫であると語られるドルイド尼僧、そして聖母マリアとジャンヌ・ダルクに喩えられる。一見したところでは、それらのイメージはそれぞれ、農民としてのジャンヌの人物像を過度に理想化しているように思われる。しかし、それらは「地界と天界の仲介者」という共通項によって一つにまとまり、ジャンヌの今際の姿と重なり合う。

ジャンヌは母親から、ドルイド尼僧は「民衆に神の状況を教える（252)」役割を担っていたという教えを受けていた。実際、ドルイドはガリアの神官であったとされており、宗教的儀式を執り行うほか、事件や争いごとの裁定を司ったり、様々な知識を伝える役割を担っていたとされる[14]。そして、フランスの歴史学者シルヴィ・バルネイによると、聖母マリアが地上と天界をつなぐ仲介者であることが、840年頃に教会によって公認されている[15]。加えて、19世紀前半にはフランス各地で聖母マリアの出現が報告されているが、その出現に立ち会った者には修道女に加えて、羊飼いの少女が多かったという記録があり、カトリック教会では羊飼いはマリアの姿を見ることができ、神の名において語る力を持っているとみなされてきた[16]。最後の一人、ジャンヌ・ダルクは元々羊飼いをしていたが、大天使ミカエルからの啓示を受けたことで戦争に身を投じることになったという逸話がある[17]。つまり、これら三人の女性に喩えられてきたジャンヌは、物語の終盤にお

14）ドルイドに関しては、以下の文献を参考とした。Stuart Piggott, *The Druids*, Thames and Hudson, 1968. および、カエサル『ガリア戦記』近山金次訳、岩波書店、2005年。
15）シルヴィ・バルネイ『聖母マリア』遠藤ゆかり訳、創元社、2001年、p. 52。
16）同上、p. 96-100。
17）1841年8月に出版された、ジュール・ミシュレの『フランス史』第5巻の中でこの逸話は次のように語られている――「彼女［ジャンヌ］はまた声を聞き、光と気高い人たちをを見た。そのうちの一人は翼があり、思慮深い裁判官のようだった。彼は彼女に言った。「ジャ

いて、神の言葉を代弁するという形で彼女らと同様の役割を果たしたのだ。

そしてジャンヌは、遺言の聞き手となったアーサーにマリとの結婚を命じている。先にも触れたが、この二人はブサックにおいてジャンヌの「詩情」を理解した人物だった。また、アーサーは「ジャンヌの性格と神秘的な共通点（191）」を持っていると語られ、マリの方は、ブサックにおけるジャンヌの一番の理解者であり、心の支えとなっており、ジャンヌはマリを「ほとんど聖母マリアのように崇拝して（211）」いた。ここでジャンヌがこの二人、アーサーを神にかなった人物と呼び、マリを天使に喩えていることからは、神と人間の仲介者であるジャンヌによって、新たな仲介者としてこの二人が選ばれたとも考えられる。

ジャンヌがアーサーに残した遺言の中には、神の意志だけではなく、ジョルジュ・サンドの意志も表れている。当時のサンドは、社会主義思想家ピエール・ルルー（1797-1871）から多大な影響を受けていたが、ルルーは「人類は一つ」という理念の下でユートピア的な平等社会を理想として掲げていた[18]。そしてサンドも同じく、身分や性別による差別、経済的格差の無い平等な社会の実現を常に求めていた。ジャンヌの「詩情」を理解し、彼女から結婚を命じられた二人について、物語の語り手は、「我々が生きている、悲惨な、有罪を宣告された時代を一世紀先んじる（309）」ような思想の持ち主だと語る。彼らの結婚は、ジャンヌ、そしてサンドやルルーが夢見る理想的社会の実現に向けた基盤となっていくのであろう[19]。また、宝を皆で分け合うようにという命令もまた、サンドやルルーが求める平等社会の実現に繋がる。このことからジャンヌは、作家に代わって、当時の社会に対する悲嘆、未来の社会に対する希望を読者に伝える役割をも果たしていると言えるだろう。

最後に、『ジャンヌ』が発表された当時の時代背景について少し触れる[20]。1830年代のフランスでは、1833年にフランソワ・ギゾーの教育法が施行されるなど、国内の初等教育が整備されていった。そして、教育環境の充実による識字率の向上と読者層の拡大に伴って、安価な大衆娯楽紙が相次いで誕生した。その中で各紙が採用した革新的な試みが、人気作家による連載小説の掲載であり、1844年発表の『ジャンヌ』は、ジョルジュ・サンドにとって初めての新聞連載小説となった。サンドは、本作の「作品解題」«notice» を1852年に記しており、その中でジャンヌの人物像に関して、初めての不慣れな発表形式ということもあって、自

ンヌ、フランス王を助けに行きなさい。そして彼の王国を彼に返してあげなさい」[...] その裁判官はやはり、聖ミカエル、裁判と戦いの厳格な大天使だった」（Jules Michelet, *Histoire de France*, t. VI, *Œuvres de J. Michelet*, Alphonse Lemerre, 1885, p. 161.）。

18）ピエール・ルルーの思想に関しては、以下の文献を参考とした。Pierre Vermeylen, *Les idées politiques et sociales de George Sand,* Editions de l'Université de Bruxelles, 1984. および、大野一道「ジョルジュ・サンドの師ピエール・ルルーの社会主義」、『中央大学経済学部創立100周年記念論文集』、2005年、p. 495-508。

19）アーサーとマリの結婚生活について作中で詳述されてはいないが、坂本は、結婚した彼らはサンドが夢見た「自由・平等・博愛を実践する理想的未来社会」を見つけるだろうと指摘している（坂本千代、前掲書、p. 12）。

20）19世紀のフランスの社会状況に関しては、以下の文献を参考とした。古谷健三、小潟昭夫編著『19世紀フランス文学事典』慶應義塾大学出版、2000年。および、原聖『＜民族起源＞の精神史――ブルターニュとフランス近代』、岩波書店、2003年。

分の思う通りの描写ができなかったと語っている。とはいえ新聞連載という形式は、前述した社会主義思想を、広く民衆に向けて表現するための格好な形式でもあったと言えるだろう。

ヒロイン・ジャンヌの今際の言葉の中に垣間見えた、ジョルジュ・サンドの求める社会像は、本作以外のサンドの小説の中でも現れている。サンドの遺した100編を超える文学作品の中でも、『フランス巡歴職人』や『アンジボーの粉挽き』など、1840年代前半に発表された小説は、「社会主義小説」と呼ばれ、理想の社会像を描いた作品群とされている[21]。貴族社会に組み込まれたジャンヌの描写を通して、貴族と農民の対比が描かれていることからは、1844年発表の『ジャンヌ』もまた「社会主義小説」としての側面を備えていると言えるだろう。また、1846年発表の『魔の沼』から始まる作品群は「田園小説」と呼ばれ、農村を舞台として農民たちの生活が描かれている。『ジャンヌ』は、農民の娘であるジャンヌを主人公とし、物語前半では農村であるトゥルが舞台とされていることから、サンドの「田園小説」の先駆け的作品であるとも捉えられている[22]。「境界」に身を置く少女ジャンヌを主人公とする本作は、作家ジョルジュ・サンド、そして読者にとって、「社会主義小説」と「田園小説」を仲介する役割を果たしていると言えるのではないだろうか。

（大阪大学博士後期課程在学中）

21）本稿におけるサンドの作品分類は、以下の文献における分類に拠る。日本ジョルジュ・サンド学会『200年目のジョルジュ・サンド――解釈の最先端と受容史』新評論、2012年。

22）ウラジミール・カレーニンは、『ジャンヌ』をサンドの全ての田園小説の先触れとみなしている（Wladimir Karénine, *George Sand, sa vie et ses œuvres*, Slatkine Reprints, t. III, 2000, p.636.）。